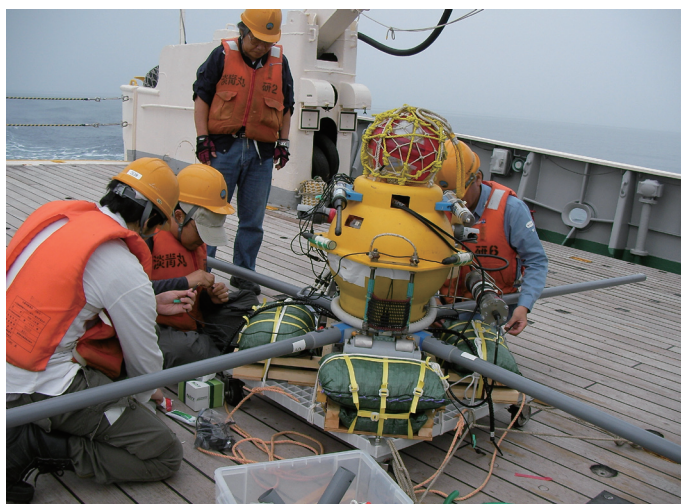




DPRI Newsletter



CONTENTS

ご挨拶 所長就任にあたって思うこと
岡田 憲夫

特集1 外部評価報告
— 4回目の外部評価会議を開催 —
戸田 圭一

特集2 平成20年度
防災研究所研究発表講演会報告
釜井 俊孝

ハイライト
高山鐵朗氏、震災予防協会賞を受賞

シリーズ NOW
1km 解像度全球作物分布図を作成
田中 賢治

研究集会
近年の大地震の特徴と構造物の耐震性に関する研究集会 田村 修次
気象災害軽減など人間活動の持続可能性に関する研究集会 林 泰一
比抵抗構造推定のための陸域・海域観測に関する研究集会 大志万 直人

掲示板 H21 年度共同研究・研究集会の一覧
H20 年度学会賞受賞の一覧
新スタッフの紹介
人事異動

上写真 宇治キャンパスの桜並木にて
岡田 憲夫所長 P2

中写真 フィールド調査での一コマです。
左上から 水田のみに生息するトンボ(中国・淮河)
農作業(タイ、玉葱畑)
農民へのアンケート(中国・淮河)
収穫直後のトウモロコシ(タイ北部) P10

下写真 隠岐周辺の海底に設置直前の海底電位差磁
力計(OBEM) P13

CAPTION

ご挨拶 Greeting



所長就任にあたって思うこと

所長 岡田 憲夫

平成21年より二年間皆様の信託を受けて所長を務めることになりました。皆様のご協力とご理解を宜しく申し上げます。また前所長を務められた石原和弘先生のこれまで2年間のご尽力に心から謝意と敬意を表したいと思えます。

さて、ときあたかも春爛漫、薫風の香る時節、一昔前であれば、宇治キャンパスも何かしら「田園的牧歌的雰囲気」にしばし英気を養う頃合なのかもしれません。しかし、昨秋からこの冬にかけての現実の世の中の動きは春の嵐を予感させます。眼前の宇治キャンパスでは耐震工事に伴うリフォームや、宇治おうばくプラザなどの新しい施設が姿を現し、改変と混沌の中から生まれる新しいエネルギーを感じさせます。同時に、それとは見えないものの、ひたひたと大きな社会の変動エネルギーが押し寄せている気配も見逃すわけにはいかないようです。たとえばグローバル化が引き起こす国際研究環境のさらなる競争の熾烈化とともに、それがもたらす新しい連携の可能性の拡大を律動的に活かすことが求められています。また中期目標・中期計画の第二期という、国立大学法人化の本格的導入期を迎え、宇治キャンパスも、そして京都大学全体も、

新たな荒波を乗り越え、世界に冠たる京都大学を切り開いていく覚悟が求められているように思われます。附置研究所の代表格の一つを自負する防災研究所の、新たな立ち位置と、担うべき役割は、果たしてどのようなもののでしょうか。

誇らしく思える防災研

私たち教職員は、京都大学防災研究所が何よりもまず誇りをもって務められる職場であってほしいと願っているはずです。そのためには、けっして現状に甘んじることなく、おごることなく常に向上することを厭わない組織である必要があります。さてそのためには何を目指すべきか。人それぞれ異なるかもしれませんが、私は防災研の舵取り役の一人として、つぎのようなことを提唱したいと考えています。

世界に冠たる防災研

防災研は、中途半端な水準に満足してはいけません。災害の学理と防災に関わる多様な研究を総

合的に担う研究所として比類ない研究所であり続けるべきです。我が国はもとより、世界に冠たる防災研究所でなければなりません。昨日より今日、今日より明日、より高みを目指した研究と教育、社会的還元を達成し続けることが期待されています。そのためには、世界の先を見据え、世界の先を行く防災研であることが求められます。

地域に根ざした防災研

高みを目指すことは、天高く上ることのみではありません。災害や防災は単なる抽象的で机上の理論のみで、その本質を捉えることはできません。足元を固め、フィールドに足をもち、五感を働かせて自然と地域のシグナルをタイムリーにキャッチすることが必要です。地域に根ざしてこそ、地域に窓が開いていてこそ、最終的利用者であるべき「防災を切実に必要としている人たち」に、本研究所の活動の成果を適切に届けるための感性が養われるはずで、日々地域とともに生き、地域と息づくフィールドを多様で、諸処に持たずして世界に冠たる防災研究所にはなりえない。幸い防災研究所はフィールド研究を重視してきた伝統があります。

考えてみるとそれは京都大学の学風にも通じることです。「京都大学の学風を作る一翼としての防災研」という自負も持ち続けたい。なお宇治地区の所内にも、そして我が国の各地（「隔地」ではない、「適地」と考えたい）に、大地と地域の体調を聴診器のように診て取るセンサー的施設が配置され、ネットワーク化されています。これらは大切な資産・資源です。ただ適材適所の配置になっているか、本当に狙い通りに機能しているのか、絶え間ない点検と改善が求められます。我が国の各地域には、地域に根ざした防災に関わる研究所や施設が多くある。ネットワーク化は防災研究所の中で留まる必要はありません。国内にとどまる理由もありません。「ネットワーク拠点の中核でリーダーシップを取る防災研」はこのような立ち位置が求められているとも言えます。

エキサイティングな防災研

さて、大きなことばかりを並べ立ててきたようですが、実はそのようなことが可能になるためには、

エキサイティングな防災研でなければなりません。多様な個性と共通の理性を互いに活かしあう防災研であってほしい。そこで働き学び交流する人たちの個性が活かされ、輝いていなくては、知的で創造的な活動はありえません。それとともにお互いにエキサイティングに交流し、討論し、必要なときには協力し合う。防災研はそのような雰囲気をもっともっと醸し出さねばならない。若い人の発想と冒険が奨励される環境づくりも必要です。その意味ではゆとりとして、「田園的牧歌的雰囲気」は、研究所の知的基盤として不可欠ではないでしょうか。

スケールのとびきり大きな発想をする防災研

最後に、防災研はスケールのとびきり大きな発想をする研究所であってほしいと思います。たとえば「グリーンライト (greenlight) 研究構想の薦め」というのはどうでしょうか。昨今の経済危機を乗り越えるために、社会基盤の戦略的整備に創造的な発想を提示することが求められています。米国のオバマ大統領のグリーンディール政策を単に真似るのではなく、我が国やアジアならではの戦略的政策転換が必要です。それなら単に欧米流の環境 (green) 主義ではなく、環境を考慮し、災害に対して総合的に強い社会基盤づくりに資する「地球診断安全信号点灯 (greenlight) 政策」のような大きなビジョンも必要です。なればともかく、世界に冠たる防災研究所は大きな構想を推進する機関車役も期待されているのではないのでしょうか。

いつの間にか春の夢を皆さんに語ってしまったようです。所長としては、これを単に夢物語に終わらせず、その一端でも現実のものにするため、微力ながらも皆様と協働作業を進めていきたいと考えています。



特集 1 Feature 1

外部評価報告

— 4 回目の外部評価会議を開催 —

1. はじめに

平成 21 年 1 月 29 日、30 日の両日にわたって、防災研究所の外部評価会議を開催しました。平成 16 年 1 月に実施された前回から 5 年ぶりとなります。なお、この途中に、京都大学防災研究所 21 世紀 COE プログラム(平成 14～18 年度)の外部評価が平成 18 年度に行われています。

今回は、防災研究所改組後の平成 17 年度からの研究所の活動、とりわけ全国共同利用に関する活動を中心に、有識者の先生方から外部評価をいただき、今後の研究所の研究教育活動、組織運営に反映させていくことを目的としました。あわせて平成 22 年度からの実施を目指す共同利用・共同研究拠点の申請の準備作業についてもご意見をいただくこととしました。

2. 外部評価委員

6 人の外部評価委員は以下の方々です(敬称略)。

長谷川昭	東北大学客員教授
藤井敏嗣	東京大学地震研究所教授
藤吉洋一郎	大妻女子大学文学部教授
水山高久	京都大学大学院農学研究科教授
道奥康治	神戸大学大学院工学研究科教授
山岸宏光	愛媛大学社会連携推進機構特命教授

3. 外部評価会議スケジュール

外部評価会議は、以下のようなスケジュールで実施しました。なお、限られた時間のなかで委員の方々に防災研究所の様子をできるだけ知っていただくため、初日に主だった大規模施設を視察いただく機会を設けました。事前に視察コースの希望をとり、2 グループに分けて行いました。その後、外部評価会議を 2 日にわたって実施しました。

1 月 29 日(木)

会議に先立ち防災研究所施設の視察

- ・宇治川オープンラボラトリ(長谷川委員・藤井委員・藤吉委員・水山委員・山岸委員)
- ・宇治キャンパス内の強震応答・耐震構造実験施設、境界層風洞実験施設(道奥委員)



宇治川オープンラボラトリーの実験施設の視察

外部評価会議(午後 2 時 15 分より)

場所：京都大学防災研究所 所長室

委員紹介に続き所長挨拶

説明ならびに質疑

(I) 防災研究所の概要

(II) 全国共同利用・自然災害研究協議会

(III) 部局の現況評価(研究)

(IV) 共同利用・共同研究拠点申請

1 月 30 日(金)

外部評価会議(午前 10 時より)

場所：京都大学防災研究所 所長室

質疑と講評

4. 外部評価会議の概要

評価会議には 6 人の外部評価委員に対して、防災研究所から、執行部、部門・センター長、自己点検評価委員会委員、技術室長、防災担当事務室長が出席しました。宇治地区事務部からも数名出席いただきました。

初日は、上に示した(I)(II)(IV)の項目について、執行部メンバーが、それぞれの担当箇所を、スライドを用いて説明しました。また(III)については配布資料に基づき口頭で説明を行いました。その後、評価委員から質問やコメントをいただき、執行部が回答する形で質疑応答がなされました。



外部評価委員の先生方



石原前所長による説明

2日目は、初日の内容に基づき、以下の項目ごとに各委員から講評をいただき、それに関連して意見交換を行いました。

- (1)防災研究所の組織・運営について
- (2)防災研究所の研究活動について
- (3)全国共同利用研としての役割・研究ネットワークの構築について、ならびに共同利用・共同研究拠点申請について
- (4)その他

外部評価委員から当日の口頭によるものに加えて、後日、書面でも講評をいただきました。主なものをいくつか抜粋してここに紹介させていただきます。(文面は若干変更しています。)

(1)防災研究所の組織・運営について

・将来、定員管理などがいっそう厳しくなることが予想され、その際には部門・センターの枠を超え人事構想を取り扱う仕組みが必要となるでしょう。常に研究所との将来構想との関連でどの分野に定員を配置するかなどを考慮する機能を持つ必要があると思われま

す。
・助教、准教授の任期制（再任有）は考えられないでしょうか。防災研の良い研究環境を10年程度の任期で多くの人に経験してもらうことで防災研のネットワークが広がることを期待できます。

・技術職員には専門的職能が求められ、人材育成に年限を要します。限られた定員の中で技術職員の能力を維持するためには、社会の関係諸分野から中途採用による即戦力をリクルートすることも一つの有効な方策と考えられます。

・地方の観測所の運営との関連では、その地域に開かれた研究所にすることにより、地方自治体の協力も得られることを考慮すべきでしょう。

(2)防災研究所の研究活動について

・よい研究をすることがもっとも大切で、それが外から見えなければなりません。防災研究所の研究（人、施設(フィールド)、情報)に魅力を感じて人(院生、海外の研究者)が集まってくるのが望ましい姿です。

・活発な研究活動が展開されていることは資料からもうかがい知ることができそうですが、学位授与機構による評価も含め国際誌へ公表した論文数が評価軸の中心にあるという現況では、更に積極的に国際誌への投稿が行われることが期待されます。

・研究所、研究センターは研究を本務とするため、それらに所属する教員は研究科・学部など教育部局所属の教員よりも多くの時間を研究に割くべきであり、より多くの研究成果を出すことが研究部局所属教員の使命であると考えられます。この観点から京都大学内の関連教育部局との業績比較をして、評価を試みる必要があります。

・防災研究所は、せっかく広い分野にまたがる多数の研究者を擁しているのだから、それらの間での共同研究を積極的に推進するなど、この利点を十分に活用した研究活動の展開をはかることを検討して欲しいと思います。

・防災研究所は、災害調査結果や成果、観測データを適宜発信していますが、防災教育・研究に役立つ普及的な発信も期待したいと思います。

(3) 全国共同利用研としての役割・研究ネットワークの構築について、ならびに共同利用・共同研究拠点申請について

・全国共同利用研として多くの共同研究を推進してきたことは評価に値します。特に、2年間の継続申請を認めている点は、短期間の研究では成果が見えにくい自然災害などの研究を推進する上で重要と考えます。

・共同研究が広く展開され、施設の共同利用状況が良好です。特に、共同研究の採択実績を見る限り、京大大学の元教員など関係者に偏ることなく、真の意味で外に開かれた共同研究を実施していることがわかります。施設の利用規程上、可能かどうかわかりませんが、民間機関による施設利用の促進についても検討していただければ、と考えます。

・研究ネットワークについては、とくに地方の観測所を抜本的に改組して、地域に開かれた防災研の窓口にすべく、人材の配置も考慮すべきです。また最近では、各地方の大学に、「防災センター」や「危機管理センター」などが多くできつつあり、それらとのネットワークが築かれることが期待されます。

・これまでの実績から、防災研究所が共同利用・共同研究拠点になるのは当然のことであるし、またその責をきちんと果たして欲しいと、所外の多くの研究者が共通して認識しているところだと思います。また、申請書(案)に記述してある目的・計画・体制はおおむね妥当と思われる。今後も、申請書(案)に記述してある通り、防災研究におけるわが国のプレゼンス向上に最大限努めて欲しいと期待します。

・拠点申請において、アジアへの展開は良いが、研究者を受け入れて育てることを優先してほしいと思います。また海外にサテライトを考えてはどうでしょうか。海外の大学の一部屋をベースとし、教員を送って共同研究を行い、学生を指導します。

(4)その他

・防災研の成果は一般市民に知らせるのも良いが、本来は防災行政に反映されるべきです。分野にもよりますが、防災研の研究成果で、防災行政に当然採用されるべきものが採用されていないケースも見受けられます。関係省庁、関係する独立行政法人の研究所などとの定期的な情報交換も良いかもしれません。

・西日本の15箇所に配置した地震、火山、地すべり、水理、海象、砂防等の実験所・観測所は、共同利用施設として、他にはない極めて貴重な財産だと思います。特に、この分野の研究には長期間のデータ蓄積が必要なこと、近年、フィールドに根ざした教育研究を行う機会が減ってきていることなどから、その重要度はますます高まっていると言えましょう。これらの貴重な施設を active な形で存続させ、有効活用をはかるよう努力していただきたい。

・地域の人々にとっては、研究所(隔地の観測所・実験所)は自慢の種というか誇りの対象であってほしいものです。また、そのような地域の誇りとなるような環境の中でこそ、いい研究ができるのではないかと思います。施設のメンテナンスを決して研究者の皆さんの負担にすることのないような、条件整備をぜひともお願いしたいと思います。

・自然災害協議会については、京大防災研だけの問題ではなく、参加している各大学や独立法人防災科学研、自然災害科学会などを含めて、わが国の防災研究に責任を負っている組織全体の問題だと思いますので、全体で議論できる場を作っていただくのが一つかと思えます。

5. おわりに

外部評価委員の先生方からいただいた講評は総じて好意的なものでした。特に、全国共同利用研としての役割・研究ネットワークの構築については、高い評価をいただいていたと思われ。一方、研究活動については、本質をつくような厳しい指摘もあり、身の引き締まる思いにかられました。

この記事では速報的な形で外部評価会議の概要をお伝えしましたが、できるだけ早い時期に外部評価報告書を取りまとめ、皆様に配布したいと考えています。

外部評価会議の開催にあたりましては、石原和弘前所長をはじめ、所内の多くの方々にご協力いただきました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。最後に、様々な準備を含め、ご苦勞いただいた平成20年度の自己点検評価委員会の皆様に謝意を表します。

((前)自己点検評価委員会委員長・戸田圭一)

サロントーク 2nd


Disaster Prevention Research Institute

Speaker: 巨大災害研究センター 教授 矢守 克也
 テーマ : TV番組のなかの土木工学
 -その時歴史が動いた/プロジェクトX/プロフェッショナル-

2009年6月26日(金) 17:00~19:00
 トーク 30分 あとはフリー
 所長室(E棟320D号室)
 対象: 防災研の教職員および学生 30名
 各自飲み物をお持ち寄りください。

防災研サロントークとは・・・
 教職員等による異分野学問領域間の交流の場

研究の最前線やゲストをお迎えしてお話、
 海外での体験談や、芸術・文化・哲学などの
 お話を聞いてフリートークをお楽しみください。



問合せ先: 広報出版企画室(内線: 4640)
 e-mail: dpri-ksk@dpri-kyoto-u.ac.jp

特集2 Feature 2

平成20年度

防災研究所研究発表講演会報告

平成20年度防災研究所研究発表講演会が、平成21年2月24日と25日の両日、京都テルサにおいて開催しました。初日は、慣例によって平成20年度末に定年退職の河田恵昭教授と萩原良巳教授による特別講演からスタートしました。ご講演のタイトルは、それぞれ「私と防災研究所—やったこと、そして期待すること—」(河田教授)、「水資源のコンフリクトマネジメント」(萩原教授)でした。

引き続き、4件の災害調査報告が行われ、川池健司准教授から「2008年7月金沢市の豪雨災害について」、多々納裕一教授から「安全性と親水性—2008年7月都賀川水難からの教訓—」、千木良雅弘教授から「2008年四川大地震による山地災害の実態」、深畑幸俊准教授から「2008年岩手宮城内陸地震による地殻変動と滑り分布インバージョン解析」の発表がありました。

今年のゲスト講演には、防災研に所縁の深い前総長の尾池和夫名誉教授に、「地震を知って震災に備える」というタイトルでお話しをいただきました。今年は新しい試みとして、会場隣に別室を用意し、講演の生中継を行いました。利用者には好評でしたが、あまり積極的にアナウンスしなかったせいか、期待したほど席が埋まらなかったのは若干残念です。その後は、例年通り、5会場(地震火山、大気水1、大気水2、総合防災、地盤)に分かれた並行セッションで研究発表が行われました。

二日目は、朝から上記5会場での並行セッションとポスターセッション(コアタイム:12時~14時)が行われ活発な議論が交わされました。講演数は、ほぼ平年並みで、総数は201件(一般講演143件、ポスター58件)、うち78件が博士前期・後期課程の学生の発表でした。これらの研究発表の要旨は、防災研のWebサイトで見ることができます。全ての講演終了後、懇親会が開催され、退職者の慰労と新入職員の紹介等を含め、参加者は和やかな時間を共に過ごしました。

(斜面災害研究センター 釜井俊孝)



特別講演

特別講演は、退職される先生方にとって、防災研究所として最後の講演となります。
今後の防災研究所に対し何を期待するのかなど、特別講演を終えられた河田教授、萩原教授にお話を伺いました。
(取材/撮影 広報出版企画室 古瀬 由紀子)

「私と防災研究所—やったこと、そして期待すること—」

京都大学名誉教授

河田 恵昭



講演内容概要

京都大学大学院工学研究科博士課程を1974年3月に単位取得退学後、4月1日付けで防災研究所助手に任用されて以来、2009年3月末に定年退官するまでの35年間の教育・研究活動を概観したものです。この間、10の重要な体験・経験が存在したことをまず指摘し、10年単位の時系列の形で、具体的な研究課題や大型研究プロジェクト、学部・大学院での担当講義の変遷、土木学会や日本自然災害学会などでの活動経歴、学会賞などの受賞歴、主な国内・海外突発災害調査事例などを紹介しました。これらの資料を通じて、大学の研究者が、長期的な研究戦略をもつことの重要性を指摘しました。ついで、防災研究所長としての大学への貢献内容を示しました。さらに、防災研究所の将来の展望として、『実際に役に立つ防災・減災研究の重要性』を指摘し、まず、被害軽減策、社会の災害脆弱性、非構造物対策などに関する個々の研究成果はそのままでは役に立たないこと、ついで、専門的、技術的な問題から防災・減災を議論するのはたやすいのですが、それだけでは大きな進歩をもたらすには不十分であること、および意思決定者は国民(世論)であり、マスメディアを介して世論を動かさずして進歩はないことを主張し、次世代防災研究所のあり方を提案しました。

教育・研究活動を概観したものです。この間、10の重要な体験・経験が存在したことをまず指摘し、10年単位の時系列の形で、具体的な研究課題や大型研究プロジェクト、学部・大学院での担当講義の変遷、土木学会や日本自然災害学会などでの活動経歴、学会賞などの受賞歴、主な国内・海外突発災害調査事例などを紹介しました。これらの資料を通じて、大学の研究者が、長期的な研究戦略をもつことの重要性を指摘しました。ついで、防災研究所長としての大学への貢献内容を示しました。さらに、防災研究所の将来の展望として、『実際に役に立つ防災・減災研究の重要性』を指摘し、まず、被害軽減策、社会の災害脆弱性、非構造物対策などに関する個々の研究成果はそのままでは役に立たないこと、ついで、専門的、技術的な問題から防災・減災を議論するのはたやすいのですが、それだけでは大きな進歩をもたらすには不十分であること、および意思決定者は国民(世論)であり、マスメディアを介して世論を動かさずして進歩はないことを主張し、次世代防災研究所のあり方を提案しました。

防災研に期待すること

—学生にとって宇治キャンパスをより魅力的に—
耐震補強がもう後2年で終わって、産学共同のセンターが出来て、構内が少しずつきれいになっていく、そういう長期目標を担当が代わっても実現していきたいです。素敵な友達もいるし、スペースもあるし、キャンパスにいて自分が魅力的で、宇治のキャンパスに行きたいと思えるようにしたい。学術研究は世界トップレベルだけれども、施設が整わないとよい学生は逃げて行きます。名実ともにトップだというなら防災研の魅力的な雰囲気が訪問者に伝わらなければなりません。競争していかなければならないから、長丁場の競争に耐えられるようにしなければなりません。がまんの連続でなく教育・研究をサポートする環境が必

要です。今は過渡期だと思っています。いったんきれいな研究環境を経験したら、レベルは下げられない、そういう形で徐々に良くなって行くことを期待しています。

—研究者をバックアップする研究環境を—

いままでは、研究が世界トップだという誇りで我慢してやってきたところがあったけれども、そんなことやっていたら良い研究はできません。

研究は共同研究であってもひとりひとりの努力が必要です。期待できない人たちが集まったところでなにもできない。最後は人間としてのプライドですよ。つまり、この問題は自分でしか解決できないという、あるいはもつという世界を走っているという意識、そういうモチベーションを組織としてバックアップする体制がいると思います。最終的には個人の努力にかかっているけれども、それを支援するような研究環境というのが必要です。

—僕たちが助手だった時代は—

経理や学生の面倒など全部やりました。教授が帰ってからやっと自分の研究ができました。当時はコンピュータがなかったから、土日も研究所に出てきて研究しました。子供が4人いますが、土日に研究室に連れてきて水槽に船を浮かべて遊ばせたり、横で塗り絵させたり、帰宅途中でラーメン食べさせたり、そういう苦勞をしています。家族に与えるべき時間を全部搾取して研究に使いました。こもりっきりで仕事するか、徹夜で仕事するか、出張に行つて一週間帰つて来ないとか、家族のために使わねばならない時間を全て研究に使ってきたのは遅ればせながら反省しています。自分は研究が好きだから報われるじゃないですか、だけど一緒に楽しい時間を共有することができなかった家族は犠牲になっていますよね。だけど若いころはおくびにも思わない。でもそんなこと思つて家族のことを中心においていたら、一流の研究者になれなかったかもしれません。競争社会だから。まわりは賢い人ばかりだからその中で生き抜くためには同じことをしてはだめなんです。

—最後は個人のモチベーションの高さ—

学問とか、研究とかだけでなく、どんな世界にいてもそういうことは言えますね。そういう意味でも、研究者の個人生活が犠牲にならないようにサポートする必要があります。今なんか大学に出て来なくても家でコンピュータを使って研究ができますから家族サービスもできます。これから研究つて長丁場だから、誰

かの犠牲のもとにあるなんてことはだめで、家庭生活と両立できるような生活環境を積極的に自分から作る努力しなければなりません。遊ぶのも自由、だけどそれを優先しては研究できない。京大は研究環境に恵ま

れています。恵まれているからこそ、個人の資質と努力が大事です。とどのつまりが個人のモチベーションの高さ、そこなんです。

「水資源のコンフリクトマネジメント」

京都大学名誉教授
萩原 良巳



講演内容概要

特別講演では、まず水資源コンフリクトの現況を世界と日本について記述し、次いでメタ認識としてのGES環境システムと計画システムの輪廻を提案し、これらを前提とし

たコンフリクトマネジメント方法の体系化としてメタ適応的計画方法論を提案しました。GES環境システムでは、アジアと欧米のメタ認識の差異を論じ、計画システムの輪廻において「環境文化災害」という視点が重要であること、そして適応的計画方法論を構成する評価にあたる「費用便益分析」の限界ならびに「多基準分析」の流れを論じ、第三者機関が介入するコンフリクトマネジメントを提案しました。さらに事例として吉野川第十堰、長良川河口堰とガンジス川のファラッ

カ堰を取り上げ、コンフリクトマネジメントの有効性とその限界を論じました。この研究に着手して10年になりますが、未だ入り口にいるように感じます。(個人も含む)人間社会の欲望の『すさまじさ』に臆することなく研究を継続することが重要です。

防災研に期待すること

研究発表講演会は、部門・センターの発表が大グループごとに各部屋に分かれているので、私の所属している講演しか聞くことができませんでした。これが12年続いています。このため、他の部門・センターの興味ある講演が、いつも聞けずイライラしていました。今後、グループ間の交流を深めることができるような講演プログラムを作成する方法を探すべきではないでしょうか？私は退職しますが、これからの防災研究所に何も期待しません。スタッフの方々が力をあわせ近いうちに、本当の意味で、防災学の世界一の研究所になることを信じています。

長い間お世話になりありがとうございました。

ハイライト *Highlight*

高山鐵朗氏、震災予防協会賞受賞

本研究所技術室の高山鐵朗氏が第16回(2008年)「震災予防協会賞」を受賞しました。授与式は2月6日にパシフィコ横浜で行われました。震災予防協会賞は、財団法人震災予防協会が、長期間にわたる地道な活動によって地震及び火山災害の予防軽減に多大な貢献をされた方々のうち、その功績が他の学協会等で表彰の対象になりにくい場合に贈呈しているもので、本研究所では、平野憲雄氏、松尾成光氏、園田忠惟氏に次いで4人目の栄誉となっています。授賞理由は「桜島火山観測所・火山活動研究センターにおける40年にわたる桜島における火山観測の遂行および日本国内外の火山観測の功績」です。高山鐵朗氏は、桜島東部の黒神に新設された観測室における観測と維持管理のために1967年(昭和42)に技術補佐員として採用されました。1974年(昭和49)から火山噴火予知計画が始まりましたが、そのころから昭和60年代にかけて、桜島は爆発的噴火を年間200～400回も繰り返し、同氏は火山灰や噴石が降る中で、桜島島内および周辺のカルデラ地域の地震観測網の整備に尽力しました。同氏が観測した地震記録から、山頂爆発の前兆地震活動が明らかになるとともに、地盤変動測定からは

マグマの貫入・放出過程が解明され、今日の桜島火山噴火予知研究の基礎が確立されたといえます。また、同氏が撮影した火山爆発の写真により爆発機構の研究が大きく発展しました。最近では次世代の観測を担う人材の育成にも努力しています。有珠火山観測所の前川徳光氏も同時授賞されましたが、火山観測は技術職員によって強く支えられているといえます。

(火山活動研究センター 井口正人)



左：桜島観測所 高山鐵朗さん

シリーズ NOW Series NOW

1km 解像度全球作物分布図を作成

平成 18 年度から 20 年度までの 3 年間、科学研究費補助金基盤研究 A 「衛星解析による全球灌漑農地情報と陸面水・熱収支解析を活用した水資源管理支援」のサポートを得て、農地情報の全球分布図を 1km という高解像度で作成することを試みました。まだまだ不十分な点がありますが、バージョン 1 のプロダクトが作成されましたので、この場をお借りして報告させていただきます。

21 世紀は「水の世紀」と言われ、人口増加や経済発展が進む中、世界の多くの人々が食料や淡水資源の枯渇に直面しています。現在世界の水消費の約 90% は農業用水であり、農作物の約 40% は灌漑で栽培されていると言われていています。近年は地球温暖化の進行と相まって、各地で異常気象が頻発し、局地的な洪水や渇水への対策、農業用水や生活用水の安定供給といった水資源管理の重要性がますます増しています。全世界の耕作地はおよそ 1800 万 km² に達し、FAO 統計 (2006 年) によると、耕作地の約 18% にあたる 277 万 km² (日本の国土の 7.3 倍) で灌漑が実施されています。このように灌漑の実施面積は広大で、その多くが大気-陸面相互作用の影響が大きい場所 (いわゆる大気陸面過程のホットスポット) であるとされる乾燥・半乾燥地域に分布しているため、灌漑が地域の水・熱収支に及ぼす効果は計り知れません。また、農地における水利用の実態を把握することは容易ではなく、通常、取水量データは存在しても、使用量データは存在しないため、実際にどれだけの水が使用されたかを把握することは困難です。陸面過程モデルで灌漑の効果を表現することは、気象予測の精度向上、水利用実態把握の両面で有効な手段と言えるでしょう。

灌漑の効果を取り扱う陸面過程モデルがいくつか開発されてきましたが、モデルパラメータ (生育作物の種類、播種日、収穫日といった農事暦) を正しく設定しなければ、モデルの性能を十分に発揮することはできません。しかしながら、全球にわたって (特に大部分の灌漑農地が存在するアジア域で) 信頼性の高いデータセットは存在せず、早急にモデルパラメータを整備する必要があります。そこで本研究では正規化植生指標 (NDVI) の時系列解析をベースとして、当研究室で開発をしてきた陸面過程モデル SiBUC (Simple Biosphere including Urban Canopy) の灌漑スキームに必要なモデルパラメータを高解像度で整備することを第一目的としました (図 1 はプロジェクトの全体構成)。

これまで、中国、ラオス、タイ、インド、ウズベキスタン、トルコ、ブルガリア、ギリシア、イタリア、チェコ等においてフィールド調査を実施し、GPS を用いて主要作物の位置情報を収集すると同時に、農家

への聞き取り調査を行いました。調査項目は作付け作物・生育期間・灌漑実施の有無等です。余談ですが、水田のあるところだけにトンボがいるということにイタリアでの調査で気付きました (表紙)。フィールド調査の情報や米国 JAWF の作付作物種情報を整理して、各作物に特徴的なフェノロジー (生物季節) 形状を抽出するための代表グリッドを設定しました (図 2 は各植生のフェノロジーの例)。

代表グリッドのフェノロジーの比較により、トウモロコシと大豆、米、小麦において単作と二期作・二毛作の 2 種類の分類基準を設定しました。また、NDVI だけでトウモロコシと大豆を識別することは困難であったので、分光反射率のデータ (青バンド) も活用しました。いくつかのテストエリアで作物判定基準の調整を繰り返した後、全球規模で解析を実施しました。判別する作物種が限られた条件ではありますが、全球にわたり 1km という高解像度で作付作物種に関する情報を整備し、これをバージョン 1 のプロダクトとしました (図 3 は全球作物分類図)。このプロダクトの特徴として、五大湖の南西部やウクライナに広がるコーンベルト、中国の二期作・二毛作地帯、水田の分布などにおいてある程度の精度が出ていますが、アフリカや南米などでは作物種を特定できなかったピクセル (図中の灰色部分) が多数存在しており、さらなる改良が必要です。

科研費プロジェクトとしては終了しましたが、今後は気象データも加えて生育期の積算温度を活用するなどして、さらなるアルゴリズムの高度化を図り、作物種の判定精度の向上を図ります。全球を対象としており、フィールド調査には限界がありますので、最後にもお願いがあります。皆様が訪れた場所において、何月頃にどのような作物が生育していたかの情報を、できれば写真とともにお寄せいただけますと幸いです。

(水資源環境研究センター 田中 賢治)

図 1

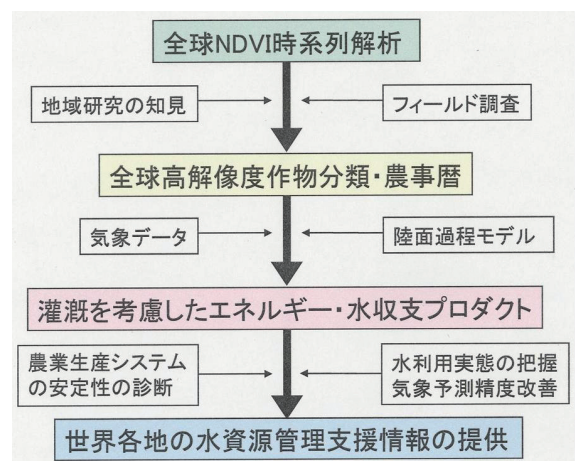


図3

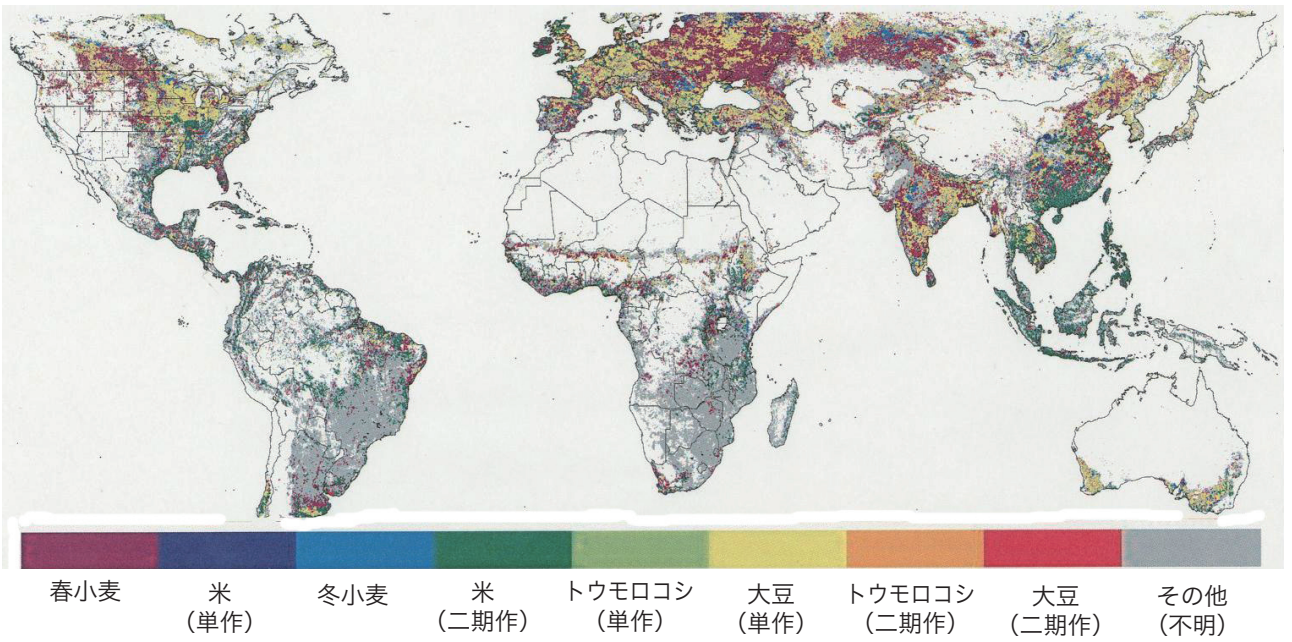
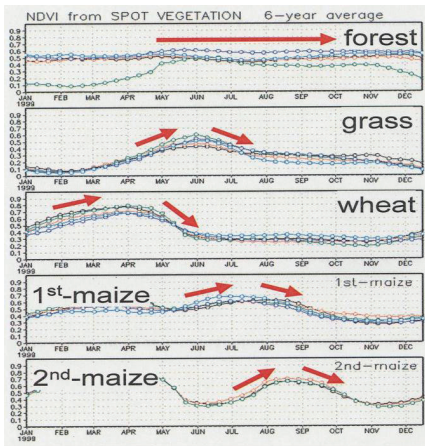


図2



綿摘みを手伝う少女 (インド・ナルマダ河)



砂漠の中の自噴井戸。塩分を含むため飲料用にはできない。(ウズベキスタン)



巨大スプリンクラー灌漑装置 (イタリア、トウモロコシ畑)



水かけ祭り (タイ)



何人乗っているでしょうか? (インド・ナルマダ河)



絨毯のように美しい小麦畑 (トルコ・セイハン川)



ギリシア・テッサリア平原

研究集会 Workshop

「近年の大地震の特徴と構造物の耐震性に関する研究集会」 —若手研究者が大いに語る—

1月21日(水)、キャンパスプラザ京都において表記の研究集会が開催しました。参加者は約40名でした。最初に研究代表者である澤田純男教授から、地震被害を軽減するためには理学・建築・土木の各分野の若手研究者の連携が重要であり、本研究集会は各分野の研究動向の把握と相互理解とともに、若手研究者が大いに語っていただくことを目的として開催されることが述べられました。

本研究集会は16名の講演者によって、1.「近年の大地震の特徴と強震動予測に向けて」、2.「構造物の耐震性と合理的な耐震性設計に向けて」、3.「近年の地震被害と将来の大地震に向けて」の3つのセッションで、大地震の発生メカニズムから超高層建物の応答まで、最新の研究を発表し情報交換するとともに、それぞれの視点から活発な議論が行われました。

最後に岩田知孝教授から、1995年兵庫県南部地震以後、理学と工学の融合が進んだこと、今後、さらに理学と工学の連携が期待されることが強調され、研究集会のまとめが行なわれました。

研究集会後の懇親会にも多くの出席があり、話がはずみました。本研究集会では、若手研究者間のみならず、異なる世代の研究者間の新しいネットワーク形成にも有意義だったと思われます。



研究集会会場にて

(地震災害研究部門 田村 修次)

「気象災害軽減など人間活動の持続可能性に関する研究集会」 —南アジア地域を中心として—

1月29日(木)～30日(金)に、京都大学宇治キャンパス木質ホールにおいて、上記の研究集会(研究代表者 村田文絵氏 高知大学理学部)を開催しました。同様の課題で採択された生存圏研究所のプロジェクト共同利用研究集会「南アジアの気象環境と人間活動に関する研究集会」と合同で開催しました。この研究集会では、防災研究推進特別事業経費プロジェクト「発展途上国の災害発生環境に関する調査研究—バンングラデシュにおける災害を例にとって—」、生存圏研究所萌芽ミッションプロジェクト「ブラマプトラ川流域における生存圏のエコシステムの持続的発展の可能性」、東南アジア研究所共同研究「巨大災害に対する民衆の知恵—ミャンマー・イラワジ管区マウービン郡の村落における事例研究—」、生存基盤研究ユニット萌芽研究「バンングラデシュと京滋地方の生存基盤(自然・健康・社会)と減災・開発への在地の知恵の体系に関する相互啓発実践型地域研究」の共同研究の成果を行いました。このため、当初の「南アジアにおける気象災害と人間活動に関する研究集会」よりももう少し大きな枠組みの研究集会と判断して、研究集会の題名を上記の通り変更しました。

ベンガル湾周辺では、2007年11月のバンングラデシュのSidr、2008年5月のミャンマーのNargisの

激しいサイクロンが襲来し大きな被害をもたらしました。このような気象災害の軽減のため、南アジア域を中心として、災害をもたらす大気現象、災害によって流行する感染症、被災地である農村社会の現状とその動態、地域植生など生態系の特徴、人間活動の歴史を含めた在地の知恵などまで包括的な議論がなされました。この研究集会を通じて南アジア域の社会とそれを規定する自然条件の現状を総体として理解し、地域社会の発展に向けた具体的な戦略を明らかにする基礎が築かれました。

(流域災害研究センター 林 泰一)



研究集会の様子

「比抵抗構造推定のための陸域・海域観測に関する研究集会」

現在、地球の地殻や上部マントルの構造を電気比抵抗構造(もしくは電気伝導度構造)として推定する観測研究が、陸域・海域を問わず活発に行なわれています。地震防災研究部門地震テクトニクス研究分野でも、2006年から日本海の海域を含む西南日本において電場・磁場を同時観測し、そのデータから地下の比抵抗構造を推定する観測研究を実施しています。その目的は、これまでの研究により既にその存在が明らかになっている山陰地域地殻下部の低比抵抗領域の広がりや、西南日本背弧域における地震活動や地震学的に求められる地震波速度構造情報との関係を明らかにすることです。写真1に示すような海底電位差磁力計(OBEM)を日本海の鳥取・島根県沖に数ヶ月間設置し観測を行ってきています。このように海底で観測されたデータを、山陰・中国地域の陸域で観測されたデータと共に解析し、西南日本背弧のフィリピン海プレートの沈み込みに伴って存在する大規模比抵抗構造を求め、山陰地域に海岸にほぼ平行に存在する地震帯での地震発生機構の解明に役立てようというわけです。この研究は、防災研究所の「平成18年度および平成20年度防災研究推進特別事業費」や科学研究費補助金「研究課題名：西南日本背弧の下部地殻・マントルの電気伝導度構造の解明(研究代表者：大志万直人)」により実施されてきました。

2月16日(月)～17日(火)の期間に、京都大学宇治キャンパス、総合研究棟2階CB207(ポスター発表会場：総合研究実験棟1階エントランス)において開催された「比抵抗構造推定のための陸域・海域観測に関する研究集会」は、平成20年度防災研究推進特別事業費により、上に述べた日本海から山陰・中国地域での観測の成果と問題点を、同様な観測研究を行っている研究者たちと検討する機会を持つと共に、他の地域での観測研究の成果に関しての情報交換を行なおうと企画した研究集会です。研究会では、招待講演を主とした「陸域・海域での電磁気観測の現状とその解釈」というセッション、陸域と海域における電磁気観測で現在直面している課題に関する「陸域と海域それぞれにおける電磁気観測の問題点とその解決策」セッション、さらに、陸域、海域、もしくは、陸域と海域連携観測による最新の成果を報告する「陸域・海域連携観測と地球内部電気伝導度構造」セッションを設け、活発な意見交換を行いました。加えて、地球電磁気学全体での基礎的/萌芽的研究や技術開発・問題提起等に関する「地球電磁気学諸問題」の、全体で計4つのセッションの構成としました。発表総数は2日間で45件(口頭発表：31、ポスター発表：14)でした。内10件は大学院生による発表で、参加者の総数は69名でした。活発な議論が行なわれ、大変盛会な研究集会とす

ることができました。

なお、この研究集会は、地球電磁気・地球惑星圏学会(SGEPSS)の中にある分科会、Conductivity Anomaly研究会の、平成20年度の活動の一環でもありました。

(地震防災研究部門 大志万直人)

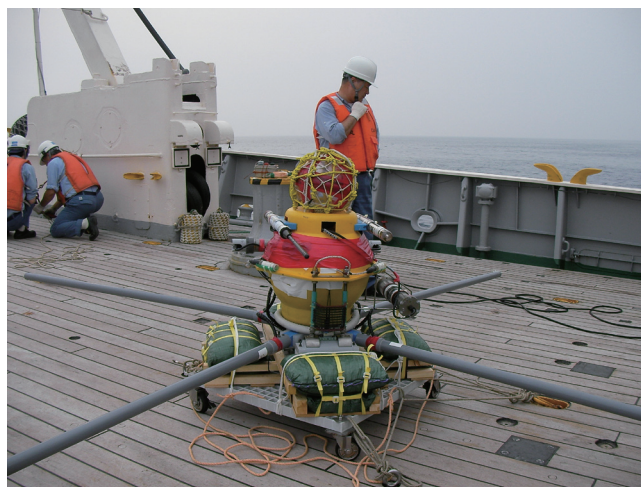


写真1: 日本海の隠岐諸島周辺海域に設置した海底電位差磁力計(JAMSTECのJM100型)



写真2: 講演の様子



写真3: ポスター会場での発表

掲示板 Information

平成21年度に実施する共同研究・研究集会の一覧

一般共同研究

課題番号	研究課題	(研究年度)	研究代表者 (研究代表者の所属機関)	所内担当者
20G-01	観測網と台風シミュレーションを用いた台風被害予測手法の開発	(20・21)	前田潤滋 (九州大学大学院 人間環境学研究院)	丸山敬 (気象・水象災害研究部門)
20G-02	地球温暖化時における河川流量の変化予測と水災害リスクマップングー日本全流域を対象としてー	(20・21)	立川康人 (京都大学大学院 工学研究科)	寶馨 (社会防災研究部門)
20G-03	天井川地形の形成過程を探るー山城盆地遺跡調査で発見された洪水堆積層に着目して	(20・21)	小泉裕司 (城陽市教育委員会)	釜井俊孝 (斜面災害研究センター)
20G-04	地震波干渉法の応用による地殻構造の時間変化の検出手法の開発	(20・21)	平原和朗 (京都大学大学院 理学研究科)	大見士朗 (地震防災研究部門)
20G-05	砂浜・潟湖系と流砂系の連関に着目した海岸侵食マネジメントの研究ー上越地域海岸を対象として	(20・21)	泉宮尊司 (新潟大学工学部 建設学科)	間瀬肇 (気象・水象災害研究部門)
20G-06	地震にともなう電磁波放射の物理的メカニズムを確定するための岩石破壊実験	(20・21)	筒井稔 (京都産業大学)	柳谷俊 (地震予知研究センター)
20G-07	桜島火山における噴火様式と脱ガス過程の関係に関する物質科学的研究	(20・21)	中村美千彦 (東北大学)	井口正人 (火山活動研究センター)
20G-08	始良カルデラおよび桜島火山における反復人工地震実験によるマグマ移動検出の基礎的研究	(20・21)	筒井智樹 (秋田大学 工学資源学部)	井口正人 (火山活動研究センター)
20G-09	浅部熱水系変動評価による水蒸気爆発発生過程の解明	(20・21)	篠原宏志 (独)産業技術総合研究 所地質情報研究部門)	井口正人 (火山活動研究センター)
20G-10	大規模カルデラ噴火の先駆現象に関する地質科学的総合研究	(20・21)	小林哲夫 (鹿児島大学理学部 地球環境科学科)	井口正人 (火山活動研究センター)
20G-11	災害リスクの国際重要インフラへの影響評価手法の開発	(20・21)	竹林幹雄 (神戸大学大学院 工学研究科)	多々納裕一 (社会防災研究部門)
21G-01	沿岸災害減災に向けた大気・海洋相互作用としての碎波観測プロジェクト	(21)	木原直人 (財)電力中央研究所)	森信人 (気象・水象災害研究部門)
21G-02	2008年岩手・宮城内陸地震による荒砥沢ダム北方山体の巨大崩壊と滑動	(21)	川辺孝幸 (山形大学地域 教育文化学部)	松波孝治 (地震災害研究部門)
21G-03	直下型地震時緩斜面における大規模地すべりの発生・運動機構	(21)	丸井英明 (新潟大学災害復興科 学センター防災部門)	王功輝 (斜面災害研究センター)
21G-04	ミュオン・ラジオグラフィーと高品位重力連続観測で、桜島火山体内マグマ移動を視る	(21)	大久保修平 (東京大学地震研究所)	山本圭吾 (火山活動研究センター)
21G-05	皆既日食に伴う地球ー下層大気ー超高層大気音波共鳴震動の総合観測	(21)	家森俊彦 (京都大学大学院 理学研究科)	大志万直人 (地震防災研究部門)
21G-06	土石流の規模拡大機構の実証実験	(21)	岡田康彦 (独立行政法人 森林総合研究所)	福岡浩 (斜面災害研究センター)
21G-07	非都市社会の災害復興過程に関する社会科学研究：中越地震と四川大地震の事例	(21)	渥美公秀 (大阪大学コミュニケー ションデザインセンター)	矢守克也 (巨大災害研究センター)

21G-08	超精密弾性波速度測定による地殻応力変化のモニタリング (21)	佐野 修 (東京大学 地震研究所)	加納 靖之 (地震予知研究センター)
21G-09	桜島・昭和火口における自律式小型無人ヘリコプターを用いた 多項目観測実験 (21)	小山 崇夫 (東京大学 地震研究所)	神田 径 (火山活動研究センター)
21G-10	ブロッキングの形成・持続メカニズムと予測可能性 (21)	伊藤 久徳 (九州大学大学院 理学研究院)	向川 均 (気象・水象災害研究部門)
21G-11	リモートセンシング、現地観測およびモデリングによる凍結融 解土砂生産に関する研究 (21)	宮本 邦明 (筑波大学大学院 生命環境科学研究科)	藤田 正治 (流域災害研究センター)
21G-12	火山噴火の時間発展と噴出物の物質科学的特徴ならびにその人 体への影響度の相関に関する研究 (21)	嶋野 岳人 (富士常葉大学 環境防災学部)	味喜 大介 (火山活動研究センター)

萌芽的共同研究

課題番号	研究課題	(研究年度)	研究代表者 (研究代表者の所属機関)	所内担当者
21H-01	緊急地震速報をテーマとした教育用展示の開発	(21)	加藤 護 (京都大学大学院 人間・環境学研究科)	片尾 浩 (地震予知研究センター)

研究集会

課題番号	研究集会名	開催予定日:下段	研究代表者 (研究代表者の所属機関)	所内担当者
21K-01	大気現象に関する観測と数値モデル研究に関する国際シンポジ ウム	平成21年11月9日～12日	津田 敏隆 (京都大学 生存圏研究所)	石川 裕彦 (気象・水象災害研究部門)
21K-02	第二回 緊急地震速報 ワークショップ	平成21年4月22日～24日	山田 真澄 (京都大学次世代 開拓研究ユニット)	ジェームズ・モリ (地震予知研究センター)
21K-03	極端気象現象とその影響評価に関する研究集会～より良い将来 を目指して～	平成21年11月5・6日 おうばくプラザ	鬼頭 昭雄 (気象庁気象研究所)	中北 英一 (気象・水象災害研究部門)
21K-04	異常気象と気候変動のメカニズムと予測可能性	平成21年10月29・30日	岩崎 俊樹 (東北大学大学院 理学研究科)	向川 均 (気象・水象災害研究部門)
21K-05	自然災害に関するオープンフォーラム: 災害に強いまちづくり ～みんなで考えよう京都の安心安全	平成21年9月28日	今村 文彦 (東北大学大学院 工学研究科)	中川 一 (流域災害研究センター)
21K-06	土砂災害予測の高精度化に向けた地形・地質・水文・植生情報 の総合化—新しい土砂災害予測技術の構築に向けて—	平成21年9月25・26日 穂高砂防観測所	多田 泰之 (独立行政法人 森林総合研究所)	藤田 正治 (流域災害研究センター)
21K-07	自然災害リスク下でのグローバルな重要社会基盤のリスクガバ ナンス: 研究者と実務者の国際対話フォーラム	平成21年6月4・5日	谷口 栄一 (京都大学大学院 工学研究科)	岡田 憲夫 (巨大災害研究センター)
21K-08	地震波によらない地震学—これまでの成果と今後の展望—	平成21年11月24・25日 木質ホール	伊藤 久男 (海洋研究開発機構 地球深部探査センター)	加納 靖之 (地震予知研究センター)
21K-09	台風災害の歴史と教訓 —伊勢湾台風から50年—	平成21年9月17・18日	佐々 浩司 (高知大学理学部)	竹見 哲也 (気象・水象災害研究部門)

平成 21 年度防災研究推進特別事業

平成 21 年度特別教育研究経費（拠点形成「事業課題：災害に関する学理と防災の統合的対策のための研究推進事業」）の特別事業です。

研究課題	研究代表者	
	所属	氏名
観測データに基づいた耐震補強の有効性に関する実証的研究	社会防災研究部門	川瀬 博
暴浪時の海底地形変動評価とその砂浜海岸マネジメントへの適用	流域災害研究センター	関口 秀雄
大加速度・速度の強震動の生成と地震被害に関する総合研究	地震災害研究部門	岩田 知孝
地殻変動観測データを用いたゆっくり地震等の検出手法の国際比較による高度化	地震予知研究センター	川崎 一朗
中山間地の災害復興支援に関する総合的研究 ー中国四川大地震、新潟県中越地震、岩手・宮城内陸地震を事例としてー	巨大災害研究センター	矢守 克也
四川大地震時発生した大規模天然ダムの決壊危険度に関する調査研究	斜面災害研究センター	王 功輝
土の粒度分布による災害履歴解読および災害素材評価に関する研究	地盤災害研究部門	千木良 雅弘
次世代型地震観測システムの共同利用	地震予知研究センター	飯尾 能久

（採択額 100 万円以上の課題を掲載）

平成 20 年度学会賞等の受賞一覧（受賞日の順）

受賞者（教職員）	受賞内容	受賞日
宮澤 理稔	2007年日本地震学会若手学術奨励賞(社団法人日本地震学会)	平成20年 5月27日
MORI, James Jiro	2007 Editors' Citations for Excellence in Refereeing	平成20年 7月29日
佐山 敬洋	水文・水資源学会論文奨励賞(水文・水資源学会)	平成20年 8月27日
樋本 圭佑	日本建築学会奨励賞	平成20年 9月18日
Ripendra Awal	日本自然災害学会 学術発表優秀賞	平成20年 9月25日
Kojiri, Toshiharu Hamaguchi, Toshio Ode, Mariko	Journal of Hydro-environment Research Top Ten Downloaded Articles	平成21年 1月 15日
高山 鐵朗	震災予防協会賞	平成21年 2月6日
Ripendra Awal Hajime Nakagawa Kenji Kawaike Yasuyuki Baba Hao Zhang	平成20年度土木学会【水工学論文賞】	平21年 3月 4日

受賞者（学生）	受賞内容	受賞日
吉田 光宏 (M1, 地盤防災解析研究分野)	地盤工学研究発表会優秀論文発表者賞 (第43回地盤工学研究発表会、2008にて)	平成20年 10月31日
Kriyo Sambodho (D3, 沿岸域土砂環境研究領域)	地盤工学研究発表会優秀論文発表者賞 (第43回地盤工学研究発表会、2008にて)	平成20年 10月31日
Badri Bhakta Shrestha (D3, 河川防災システム研究領域)	第53回土木学会水工学講演会【国際セッション優秀論文賞】	平21年 3月 4日

新スタッフの紹介



水資源環境研究センター 教授 ^{すみ てつ や} 角 哲也

平成21年4月1日付で、大学院経営管理研究部(工学研究科社会基盤工学専攻兼任)から異動し、水資源環境研究センター社会・生態環境研究領域の教授として着任しました。学部・修士と京都大学(工・土木)で学んだ後、建設省(現国土交通省)に入省し、主につくばの土木研究所でダムの水理設計や貯水池の運用操作、水質、土砂堆積(堆砂)問題などに約15年取り組んで参りました。大学には平成10年に戻り、約10年の工学研究科での生活(この間吉田から桂へ移転)から今回3つ目の宇治キャンパス勤務となります。

専門は、水工水理学、河川工学、ダム工学です。日本には、堤高15m以上のダムがこれまでに約3,000箇所建設されていますが、貯水池に恒常的に流れ込む土砂の堆積によりその貯水容量が年々失われています。この堆砂問題は、ダムの利水・治水機能の低下のみならず、下流河川の河床低下や海岸侵食などの河川・沿岸域の防災を含む環境問題の一因でもあります。

防災研究所では、これまでの経験を活かし、水資源開発の要として地域発展に貢献してきたダムの価値を高め、一方で、上記のような環境負荷などのマイナス面を少しでも軽減するための研究および技術開発に取り組む所存です。その際のキーワードは、気候変動に対する適応策、流砂系の総合土砂管理、流域の生態系保全、これらを含む水資源システムの持続可能性追求とリスクマネジメントです。

防災研究所の各分野の専門家の方々と連携を図りながら次世代に繋がる研究教育活動に貢献して参りたいと考えております。



地震予知研究センター 准教授 ^{と お だ しん じ} 遠 田 晋 次

産業技術総合研究所活断層研究センターを退職し、4月1日付けで地震予知研究センターに准教授として着任いたしました。これまで、電力中央研究所、米国地質調査所(客員)、東大地震研究所、産総研と、多様な組織を渡り歩き、サイエンスだけではなく成果の社会還元に関しても貴重な経験を積んできました。この間、発電所立地に関わる地質調査、活断層の掘削調査や内陸地震の確率評価、地震連鎖のモデル化などの研究を行ってきました。研究目標は、地形地質学と地震学の学際分野を切り開きつつ、内陸地震の発生の仕組みを明らかにすることです。長期予測の精度を上げ、地震災害軽減を目指します。

これまで長らく関東北東部に居を構え、自分自身が直下型地震の恐怖を感じることはありませんでしたが、これからは活断層が群雄割拠する近畿地域での研究生活となります。「足下に活断層」を自ら感じつつ、断層活動自体が生み出したすばらしい自然環境の中で、地震防災に少しでも貢献できるよう研究・教育活動に努力精進するつもりです。



流域災害研究センター 助教 ^{す ず き たか ゆき} 鈴 木 崇 之

平成21年度4月1日付けで、(独法)港湾空港技術研究所海洋・水工部沿岸土砂管理研究チームから異動し、流域災害研究センター流域圏観測分野白浜海象観測所の助教として着任いたしました。4年間在籍した港湾空港技術研究所では、最初の2年間を茨城県神栖市の波崎海岸に立地している波崎海洋研究施設(HORS)、残りを神奈川県横須賀市にある本部に勤務していました。私の専門分野は沿岸域における漂砂であり、浮遊砂の巻き上げに関する研究を始め、HORSにて得られた地形データや波浪データを利用して、波の遡上域の地形変化モデルの開発、汀線位置の長期変動特性および波浪、沿岸流との関係などについて研究を行ってきました。

防災研究所では、現地の現象を間近で観察できる白浜海象観測所勤務となり、HORSでの経験が生かせればと考えております。これまで水際線の前後のみであった私の研究領域を陸側と沖側に広げ、沿岸域における災害の学理の深化と防災・減災へ向けた水・土砂・物質移動に関する研究を行い、沿岸災害の防止・軽減や沿岸環境の保全・回復に微力ながら貢献して参る所存です。



広報出版企画室マネージャー
おおやま たつお
大山 達夫

やりました侍ジャパンV2。広報は皆様全員が広報マンという意識が必要で、古いようですが一丸となって初めて達成するもの。私事ですが平成元年に勤めて以来の防災研究所は懐かしい。どのキャンパスも整備されているが、変わるところと変わらないところの防災研の広報に尽力したいので是非ご協力を！！

広報室 が2階に引っ越しました。(S-204D)

道を隔てて向かい側に木質ホールが見えます。気軽にお立ち寄りください。



広報室スタッフ 左から：古瀬 白田 大山 松浦



技術室 穂高砂防観測所 いちだ ことろう
市田 兎太郎

平成21年4月1日付けで防災研究所技術室 穂高砂防観測所へ配属になりました。平成21～22年の2年間は技術室での勤務が中心となります。

平成21年3月まで専門学校で情報処理、プログラミングの学習をしていました。専門学校で学んできた事を今後最大限に活用していきたいと思っておりますが、勤務していく中で今までに経験した事がないという事が多く出てくると思っております。その時に覚えておこうとただ思うのではなく、積極的に聞きそれにはどんな意味があるのかなどを意識的に学んで今後の勤務で活用できるようにしっかりと身につけていきたいと思っております。

先日まで学生でしたのでこれから勤務等様々な事に戸惑うという事もあるかと思っておりますが、一生懸命元気にやっています。



技術室 白浜海象観測所 くぼ てるひろ
久保 輝広

平成21年4月1日付けで防災研究所技術室に配属になりました。流域災害研究センター白浜海象観測所勤務となりました。

以前は家電メーカーのサービス会社に勤務し、家電製品全般の修理及びメンテナンス業務をしておりました。

この防災研究所勤務するにあたり、初心を忘れることのないよう意識して行動し、自分自身の弱い部分をきちんと見つめ直して、職場、業務から様々な事を学びながら、日々成長していきたいと思っております。特にネットワーク関係、船舶関係の業務は知識、技術ともに強化していきたいです。

未熟者でまだまだ至らない点も多く、皆様にはご迷惑をおかけすることもあると思っておりますが、一日でも早く戦力となり、皆様のお役に立てるよう頑張ります。



技術室 桜島火山観測所 そのだ ただおみ
園田 忠臣

平成21年4月1日付けで附属火山活動研究センター桜島火山観測所へ配属になりました。以前勤務していた会社では主にパソコンのハード・ソフトトラブル対応、操作指導、ネットワーク構築作業等に勤めて参りました。

私は桜島に住んでいるのですが、「今日の桜島はどんな表情をしているのだろうか?」「噴煙を上げているのかな?」と毎日何かしら気にかけておりました。そんな桜島を研究観測している桜島火山観測所に勤めることができ、大変うれしくまた光栄に思っております。これからも毎日桜島を見続け、桜島の観測網の設置、維持に1日でも早く業務を遂行できるよう努めて参りたいと思っております。また桜島だけ

だけではなく他火山の観測にも従事し、戦力になれるよう努力していきたいと思っております。

まだまだ未熟者ではございますが、今までの経験を生かし、また諸先輩方から技術を学び、早く自分のものにできるよう頑張っていきたいと思っております。



いちかわ のぶ お
桜島観測所 市川 信夫

平成21年3月末をもって38年間勤めさせていただいた当研究所を定年となりました。この間は、人為地震発生装置や分散並列型強震応答実験装置という大型振動台の維持管理が主な仕事でした。本来なら、再雇用では当職場に残り、後任の若手技術員と共にさらなる技術の育成を図るのが筋かと思いましたが、定年後は南の地で過ごしたいとの思いも強くありました。幸いにも関係者の方々の心温まるご配慮により、桜島火山観測所で勤めさせていただくことができました。しばらくの間ですが、火山を始め防災研究に邁進されている先生方のお仕事に、僅かでも何らかの形でご支援できればと思っています。



しみず ひろき
地盤防災解析分野 清水 博樹

平成21年3月31日をもって、約40年間勤めさせていただいた京都大学を定年退職となり、4月から再雇用制度により、再び地盤防災解析分野（井合研）で勤めさせていただくことになりました。今現在、新日鉄護岸で採取した凍結試料で液化試験を行っており、これからも採取した粘土、砂等の試料を用いて、室内実験をさせていただこうと思っています。



しだ まさお
穂高砂防観測所 志田 正雄

京都大学に就職し、42年が経とうとしています。勤務地は穂高一筋でした。採取した土砂を乾燥した後、重量測定、粒径測定を行っていました、数年間大半がこの作業のくり返しだった様に思います。集中豪雨で観測施設の破損、土石流による機器の流失、修理不能等、莫大な被害を何回も受けて参りましたが、人命に関わる事故、大きな怪我もなく定年退職に際し、防災研究所皆様方より公私にわたり御指導を頂き、また、多くの方々に御迷惑をお掛けした事お詫びします。皆様方の仕事の手助けが出来る様頑張ります。



ふじた やすよし
屯鶴峯観測所 藤田 安良

平成21年3月に定年退職いたしました。再雇用により当観測所に少しの間だけ勤務継続の考えです。私のイメージでは、定年というのは天下晴れての瘋癲老人と認められてFREEDOMなどと云いながら世間を年中徘徊彷徨出来ることである、と期待しております。

したが年金支給開始時期は遅れるし、貯金通帳残高は噴飯ものであるし、嬪は金品を要求するしで、いま暫く世に憚らせていただく所存であります。



こんどう かずお
徳島観測所 近藤 和男

平成21年3月に定年退職となり、4月1日より再雇用職員として再度地震予知研究センター徳島観測所に勤務させていただく事になりました。定年までの業務は四国東部における微小地震の観測に関しての本所（石井）の観測機器の保守及び付属観測点（3ヶ所）の維持管理及び地震データの読み取り・解析処理を行ってきました。又、地震予知センターの業務として鳥取県を中心とした地殻比抵抗構造探査のためのMT観測及び徳島県海陽町の地下水観測を数年にわたり行ってきました。これからは徳島に設置済の観測点（4ヶ所）の維持管理、又琵琶湖西岸における“満点計画”に関わらせていただく事になっています。これからも、よろしく願いいたします。



なかお せつろう
鳥取観測所 中尾 節郎

平成21年3月に京都大学を退職し、この4月から再雇用制度により地震予知研究センター鳥取観測所で勤務します。振り返りますと、昭和43年から2年間と退職前7年間は宇治勤務でした。特にこの7年間、地震予知研究センターと技術室で多くの技術・研究支援依頼をいただき、働くことが出来たことは、自分にとってとても良い経験であり、人生の糧になるものを得たと深く感謝しております。これからは古巣である鳥取観測所に戻り、以前から行っていた地震波形の読み取りと解析を行い、少しでも地震予知を目指した研究支援ができるよう頑張りたいと思っています。また、地域の観測所としての役目を果たすよう勤め、日々努力して頑張りたいと思っています。



たかやま てつろう
桜島観測所 高山 鐵朗

42年間勤務しました防災研究所をこの3月31日付けで定年退職しましたが、4月1日から再雇用職員として再度お世話になることになりました。勤務地は従来通り鹿児島島の火山活動研究センターで、仕事の内容も火山観測全般になります。2006年6月から48年振りに活動を開始した桜島の昭和火口（標高830m）は活発な火山活動を繰り返しています。今後どのような活動へと推移するか興味のあるところですが、これまでの観測経験を生かして微力ながらも観測・研究のお手伝いが出来たらと考えております。

人事異動

転入等

(平成21年4月1日付)

角 哲也 教授(水資源環境研究センター)昇任
(←大学院経営管理研究部・准教授)

矢守 克也 教授(巨大災害研究センター)昇任
(←同センター・准教授)

遠田 晋次 准教授(地震予知研究センター)採用
(←(独)産業技術総合研究所研究員)

鈴木 崇之 助 教(流域災害研究センター・白浜海象観測所)採用
(←(独)港湾空港研究所任期付研究官)

大山 達夫 広報出版企画室マネージャー・特定職員 採用
(←総務部広報課専門員)

藤原 清司 技術室機器運転技術グループ長 昇任

市田 児太郎 技術室(穂高砂防観測所)採用

久保 輝広 技術室(白浜海象観測所)採用

園田 忠臣 技術室(桜島火山観測所)採用

[再雇用職員]

市川 信夫 技術室

清水 博樹 技術室

藤木 繁男 技術室

志田 正雄 技術室(穂高砂防観測所)

藤田 安良 技術室(屯鶴峯観測所)

近藤 和男 技術室(徳島観測所)

中尾 節郎 技術室(鳥取観測所)

高山 鐵朗 技術室(桜島火山観測所)

転出等

(平成21年3月31日付)

河田 恵昭 教授(巨大災害研究センター) 定年退職

萩原 良巳 教授(水資源環境研究センター) 定年退職

芹澤 重厚 助教(流域災害研究センター・白浜海象観測所) 定年退職

許斐 直 助教(地震予知研究センター・徳島観測所) 定年退職

[定年退職職員]

中尾 節郎 (技術室企画情報班長)

市川 信夫 (技術室機器運転班長)

高山 鐵朗 (技術室観測班長)

浅田 照行 (技術室企画情報班コンピューターシステム掛長)

志田 正雄 (技術室機器開発班機器設計掛長)

近藤 和男 (技術室観測班観測第一掛長)

藤田 安良 (技術室観測班観測第三掛長)

藤木 繁男 (技術室)

清水 博樹 (技術室)

[再雇用任期満了]

和田 安男 技術室(上宝観測所)

(平成21年4月1日付)

宮澤 理稔 (東京大学地震研究所・准教授) 転任
(←地震防災研究部門・准教授)

編集後記



撮影：HM

広報出版企画室が発足し、編集に携って約2年が経ちました。除々にその効果が発揮され、防災研究所の活動状況をより迅速に、より分かりやすくお伝えすることが出来るようになりました。さらに、その間にニュースレターのデザインも一新され、ともすれば定例的、画一的であった報告事項のページも見易く改善されました。発足3年目となる今、さらに日進月歩でホップ(1年目)ーステップ(2年目)ージャンプ、と期待されています。今後は、おうばくプラザの10月竣工に向け

て一般の方に読んでいただけるような広報誌を目標にしたいと思います。次号のシリーズNOWは「三角波って知ってますか?」と「最新型偏波レーダーによる同期共同観測(仮名)」の予定です。

編集：広報出版企画室 広報・出版専門委員会
発行：京都大学防災研究所 対外広報委員会
連絡先：〒611-11 宇治市五ヶ庄

TEL：0774-38-4640 FAX：0774-38-4254

URL：<http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp>

ご意見・ご要望は下記Eメールにお寄せください。

e-mail：dpri-ksk@dpri.kyoto-u.ac.jp